

このごろは、仕事に家を出るころようやく白々と明るくなってくる。冬至はもう少し先なので、これからも一段暗くなる。早朝だったはずのランニングは、今はすっかり深夜のそれになっている。さらにジワジワと寒くなってくると、春が近づいて明るくなるのを一日千秋の思いで待つようになる。

寒さは厳しくても、晴れ上がってオリオンなどが天空を圧している気分は浮き立つのだが、いかんせん山陰の冬は曇りと相場が決まっただけで、たいしては真つ暗闇の中を走る。これまで会釈を交わしていた散歩の老人たちは、夜明けの時間に合わせてシフトチェンジをするので、だれにも会わなくなる。ガサガサのガラガラだの老人たちの立てる音もなくなり、となりを流れているはずの川もただ闇を流すばかりで、街灯を反射してようやくそれに知れる。

ほとんど無音の川が、ごくたまに「バシャン」と大きな音を立てることがあってビクツとする。ちよつと考えると水鳥の作業だとわかるのだが、その瞬間は、「すわ、身投げか」と縁起でもないことを思ってしまう。

この間は、走っているといきなりそばからぼそぼそと話し声が聞こえてギョツとした。何のことはない、学生たちが数人真つ暗なベンチで話していた。若者ら

しい生気でもあれば気づくはずだが、徹夜明けでくたびれていたのか、押し殺したような声でささやくのみで、隣に来るまで気がつかなかった。迷惑なのだが、自分も学生時代は、酔い覚ましに似たような行為を似たような時間にやったような気がする。当時驚かせてしまっただけに詫言ひるほかない。

平日は仕方がないとして、週末は起床時間をずらして明るくなってから走ればよいのであるが、就寝起床の時間調節など、少し前まで苦もなくできていたことがまったくできなくなってしまった。起きているか寝ているか、人はどつちかであってそれ以外はあり得なかったのに、それがどうだ、起きていても寝ているのでもない時間にお付き合ひさせられるとは。そんなものいらぬのに、加齢の特典で強制的に付与されるようなのだ。

毎日わずかな葛藤をへつつも、寝る苦痛よりは起きる苦痛の方がましな気がして、ごそごそと支度をして走り始める。週末は長時間走るの、昨日は宍道湖畔まで足を伸ばした。うつつすらと残った下弦の月を映した深夜の湖に漁り火をともした漁船が一艘。引き上げの網の重りが船縁をこすってカラカラと規則的な音を立てている。白魚漁か。宍道湖の恵みが次々浮かぶ。ちよつとばかり楽しくなってくる。



専業ババ奮闘記(その2) 34

## 木幡智恵美

出産(1)

義母のことは夫に頼み、真つ暗な中を、玉湯にある娘の家まで車を走らせる。信号はどこも点滅で、すれ違う車はほとんどない。家に着くと、玄関に娘と忠ちゃんが立っていた。

「寛大と実歩二人だけにしておけないからね」細い声で娘が言う。当たり前だ。二人が出ていくと、すぐに二階に上がった。豆球の明かりで、寝入っている二人が見える。実歩が布団の上に脚を出しているので布団の中に入れる。二人の間に横になると、今度は寛大が動いて反転する。二人の間に潜り込み、布団を掛けるのが仕事だ。目を閉じる暇がない。二時間余り、その作業を繰り返していたところ、下で物音がした。時計を見ると、三時だ。階段をゆつくり上ってくる音がし、戸が開いて忠ちゃんが顔を出した。「まだ生まれそうにないけん、一旦帰れつて。お母さんも帰つて少し寝てください」と言われるので、「六時頃にまた来るね」と言つて、また暗い道に車を走らせた。家に着くと鍵がかかっている。眠っている夫には悪いと思いつつも、携帯電話で起こし、開けてもらう。

少しだけ眠り、五時には起きて朝食を摂り、娘の家に向かう。あり合わせで忠ちゃんの弁当を作り、寛大と実歩の朝食を作る。「どうしても仕事が終わるまで。後のこと、お母さん、頼みます」という忠ちゃんに、「娘は、寛大と実歩を出産に立ち会わせたいっていうけど、顔を見せるだけで、立ち会いまでは止めとこうと思うけど、それでいい」と確認する。寛大の時に、その場にいられないほどの思いを共有していたので、忠ちゃんも同じだろうと確信はしていた。「ぼくもそう思います」と言つて、忠ちゃんは六時半に家を出た。長男を送り出す時も、いつも六時半だ。

家の中に入り、寛大と実歩に朝食を摂らせ、着替えをさせたり、歯磨きをさせた。明日から、場所を我が家に移し、こういう朝が毎日やってくるのか。これに義母の世話も加わるのか。いやいや、まずは、娘の無事な出産だ。

保育所に行く準備が整った寛大と実歩を車に乗せ、「お母さんに会いに行くよ」と言つて病院に向かった。

30代フリーター やあ、ジイさん。考える技術の自己啓発本がいろいろ出ている。考えない仕事はAIに奪われるかもしれないからか。

年金生活者 私も2冊ほど読んだことがあり、大いに啓発された。両方に共通していたのは、「ああでもない、こうでもない」と思案するのは何も考えていないのも同然としてのことだ。考えることを仕事に役立てるのをおまな目的とした本だから当然と言えるが、考えの深さは「ああでもない、こうでもない」から生まれることも確かだ。

『自分のアタマで考えよう』（ちきりん、2011年）という本は、「ああ、どうしよう。困った。このままじゃダメだ！ とりあえず様子をみてみようか？ いやダメだ……」といった状態を例にあげ、「むしろこれでは『なにも考えていない』状態に近い気さえます」と言っている。『思考中毒になる！』（齋藤孝、2020年）という本も「ああでもない、こうでも

ない」といった「考えごと」は「心配ごと」がほとんどで、思考ではなくて「堂々めぐり」と言っている。

イノベーションが利潤の主要な源泉となった現在の資本主義が絶えず新しいアイデアを要求する以上、結果を出さなければならぬから当然の指摘だろう。

30代 たいていの人間はあまりものを考えていないことを前提に書かれた本だな。

年金 考えていないように見るとすれば、仕事上のアイデアを出すための思考を要求される職種は今でも全体から見れば少数で、労働者の大多数はルーティンワークをこなすことに労働時間の大部分を費やしているからだ。

それは何も考えていないということではなく、職場の上司や同僚と波風立てずに自分の意向を通すにはどうしたらいいか、取引先を説得する材料はないか、家族に起きた「心配ごと」にどう対処するか、といった「人間関係」にかかわることを必死で考えている。

く、自分の前の世代へ、そして自分のいる社会の前の時代へ。それには限度がない。そのぶん思考は深くなる。現在を変えることがないという意味では受動的な思考だが、その深さによって、あるいは過去にさかのぼる時間の長さによって、現在の痛みを相対化し、その度合いを和らげることができ

る。これに対し、結果を求める思考は能動的と言える。けれど、未来は過去のようには確固として存在しているわけではない。思考を先へ先へとどこまでも

それが「ああでもない、こうでもない」となるのは、判断の物差しを絶えず変えざるを得ないからだ。人間関係を対象にする以上、自分の立場ばかりでなく、相手の立場や第三者の立場、時には公の立場にも立ってみなければならぬ。仕事でアイデアをしばり出すときのように、物差しが決まっているわけではない。

物差しが変わるといことは、対象に向けられた心の位置と向きがそのつど変わるといことだ。その動作が層をなし、思考に深さを与える。水路を掘ろうとして巨石に突き当り、「ああでもない、こうでもない」と試行錯誤を繰り返しているうちに、深い井戸を掘ってしまう。そんなたとえが思い浮かぶ。

そこからはすぐに役に立つアウトプットは得られないかもしれないが、揺れる主体を均衡させる支えを築くことにつながる。

30代 ジイさんもそうかい。  
年金 ひとりできるとき私の心はた

進めていくことは不可能だ。原因を求める思考ほどには深まらない。その代わり、あらゆる行動の選択肢を想定しようとするので、思考は広がりを持つ。それが現在を変えることにつながる。つまり、今の痛みを除去する可能性がある。

30代 知識人だからといって、とくに考えることが多いというわけじゃなさそうだ。

年金 ラカンが言っている。「思考が服を着て歩いているような人のなかで活動している思考が、生きていくこと（エグジスタンス）にもっとも密接に結びついたさまざまな必要にとらわれている勤勉な家政婦の思考よりもずっと多い、ということはおそらくありません」（『無意識の形成物』佐々木孝次ほか訳）

私たちはときに知識人の思考を、ときに大衆の思考をすることができ、それぞれ別の思考の総量を足し合わせ分量の思考をひとりで担うことはできない。

年金 痛い目に遭ったとき、困難にぶつかつたとき、「なぜだ」と考えるのが知識人なら、「どうしよう」と考えるのが大多数の人たち、大衆と言えるかもしれない。前者の考えが過去に向かうのに対し、後者は未来に向かう。言い換えれば、知識人の思考は原因を求め、大衆のそれは結果を求める。

原因を求める思考はどこまでも過去にさかのぼる。自分の過去ばかりでな

ニュース日記 766  
中村 礼治

## 考えるとはどう いうことか